

## ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart

### 交響曲 第25番 短調 K.183 (約25分)

Symphony No. 25 in G minor, K. 183

- |                                      |                       |
|--------------------------------------|-----------------------|
| 第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ<br>Allegro con brio | 第2楽章 アンダンテ<br>Andante |
| 第3楽章 メヌエット<br>Menuetto               | 第4楽章 アレグロ<br>Allegro  |

### ヴァイオリン協奏曲 第3番 長調 K.216 (約25分) ★

Violin Concerto No.3 in G major, K. 216

- |                      |                      |                                  |
|----------------------|----------------------|----------------------------------|
| 第1楽章 アレグロ<br>Allegro | 第2楽章 アダージョ<br>Adagio | 第3楽章 ロンド：アレグロ<br>Rondo : Allegro |
|----------------------|----------------------|----------------------------------|

— 休憩 (20分) — Intermission

### ディヴェルティメント 二長調 K.136 (約18分)

Divertimento in D major, K.136

- |                      |                       |                     |
|----------------------|-----------------------|---------------------|
| 第1楽章 アレグロ<br>Allegro | 第2楽章 アンダンテ<br>Andante | 第3楽章 プレスト<br>Presto |
|----------------------|-----------------------|---------------------|

### 交響曲 第34番 長調 K.338 (約21分)

Symphony No.34 in C major, K. 338

- |                                     |                                       |
|-------------------------------------|---------------------------------------|
| 第1楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ<br>Allegro vivace | 第2楽章 アンダンテ・ディ・モルト<br>Andante di molto |
| 第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ<br>Allegro vivace |                                       |

指揮：ユベール・スダーン Hubert Soudant, Conductor

ヴァイオリン：青木 尚佳 Naoka Aoki, Violin (★演奏曲)

2016 4/23(土) 3:00PM開演

兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催：兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますのでご了承ください。



助成：公益財団法人アフィニス文化財団

これさえ  
見れば  
わかる!

# 今回の聴きどころ

飯尾 洋一(音楽ライター)

## 故郷ギルツブルクで過ごした雌伏の時

モーツァルトといえばウィーンの音楽家としてのイメージが強いが、それは音楽の都に移り住んだ後半生の話。ギルツブルクに生まれたモーツァルトは、13歳で地元の宮廷楽団のコンサートマスターを務めて以来、大司教の宮廷音楽家としてヴァイオリンを演奏しながら、作曲の職務を果たしていた。

やがてモーツァルトはギルツブルクでの活動だけでは満たされなくなり、大司教コロレドと対立の末に職を辞して、広い世界へと飛び出すことになる。故郷で過ごした時は、モーツァルト本人にとっては不遇の時代だったかもしれない。しかし、この雌伏の時にもまぎれもない傑作が数多く生み出されている。本日演奏されるこれらの作品に耳を傾ければ、若き日のモーツァルトが決して未熟だったのではないことがわかるだろう。

## ライターおすすめ「必聴ポイント」



モーツァルト：交響曲 第25番 短調 K.183

### あふれ出るパッション、貴重な短調の交響曲

作品のほとんどが長調で書かれるモーツァルトだが、こちらは貴重な短調作品。同じ短調の交響曲第40番との対比から「小短調」とも呼ばれる。青春ゆえのほとばしる情熱。

モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲 第3番 長調 K.216

### のびやかで流麗なヴァイオリン・ソロ

オーケストラの入団オーディション課題曲としてよく選ばれるのがこの曲。テクニックと表現力のバランスが求められるということか。天衣無縫のヴァイオリン・ソロに心洗われる。

モーツァルト：ディヴェルティメント 二長調 K.136

### CMでもおなじみ、16歳で作曲した初期の名曲

神童として欧州中に名を馳せたモーツァルト。若年期の代表作を挙げるなら、まずはこの曲。シンプルながら爽快で、若き才能の息吹が伝わってくる。テレビCMなどでも人気の一曲。

# PROGRAM NOTE

曲目解説 — 演奏をより深く楽しむために 飯尾 洋一(音楽ライター)

## モーツァルト:交響曲 第25番 短調 K.183

初演:不明

### 短調が生み出す嵐のシンフォニー

ミロシュ・フォアマン監督の映画「アマデウス」のオープニングで印象的に用いられて以来、一躍広く知られることになったのがこの交響曲。モーツァルトの作品は大半が長調で書かれているが、この第25番と第40番のふたつの短調交響曲は異彩を放っている。

作曲は1773年、ザルツブルクにて。当時作曲者は17歳。この年齢にして後世に残る傑作交響曲を書き上げたのだから驚くほかない。強い感情表現が作品に暗くドラマティックな性格を与えている。

第1楽章はアレグロ・コン・ブリオ。冒頭の弦楽器によるシンコペーションが緊迫感をみなぎらせ、嵐のような効果を生み出す。

第2楽章はアンダンテ。柔和で憧憬に満ちた緩徐楽章。弱音器付きのヴァイオリンとバスーンの対話が美しい。

第3楽章はメヌエット。メヌエットといえば通例は優美な舞曲であるが、ここではむしろ情熱的で、悲劇的な空気すら漂わせている。トリオ(中間部)はオーボエ、バスーン、ホルンのみで奏でられ、一転してひなびた管楽セレナード風となる。

第4楽章はアレグロ。静かにうごめくような主題ではじまり、推進力あふれる楽想がくりひろげられる。第1楽章で耳にしたシンコペーションのリズムも加わって、緊密なフィナーレが築かれる。

#### 楽器編成

オーボエ2、バスーン2、ホルン4、弦楽5部

## モーツァルト:ヴァイオリン協奏曲 第3番 長調 K.216

初演:不明

### 若き才能の豊かなインスピレーションが結実

ザルツブルク時代のモーツァルトはヴァイオリニストとして、自身の作品や他人の作品を演奏していた。1777年、モーツァルトがミュンヘンで自作を弾いた際には、父レオポルトに宛てて「ヨーロッパ最高のヴァイオリニストのように弾きましたよ」と半ば皮肉を込めた調子で手紙に書いている。これに対して父は「お前は自分がヴァイオリンをどんなにうまく弾くのか知らないのだ。当代随一のヴァイオリニストのつもりで弾くなら、決してぞんざいに弾いてはならない。子供のころからピアニストとして知られたお前が、ヴァイオリンも弾くことなど、多くの人は考えたこともないだろう」と答えている。

ヴァイオリン協奏曲第3番は1775年、ザルツブルクで作曲された。従来の作品から音楽的な成熟度を格段に高めており、モーツァルトがヴァイオリン協奏曲の分野で残した最初の偉大な傑作と呼んでもよいだろう。

第1楽章はアレグロ。朗らかで愛らしい主題で開始され、優美さと快活さを交代させながら、よどみない音楽の流れを作り出す。

第2楽章はアダージョ。弱音器付きの弦楽器に乗って、独奏ヴァイオリンがのびやかで甘美な主題を奏でる。

第3楽章はロンド、アレグロ。8分の3拍子の宮廷舞曲風の主題で開始されるロンドだが、後半で2分の2拍子のアンダンテに変化して、弦楽器のピッツィカートを伴奏に独奏ヴァイオリンがガヴョット風の主題を奏でる。さらに民謡由来のアレグレットが続いて、目まぐるしく表情を変化させた後、ふたたび冒頭主題にもどり、さりげなく曲を閉じる。

#### 楽器編成

独奏ヴァイオリン、オーボエ2、ホルン2、弦楽5部

## モーツァルト:ディヴェルティメント 二長調 K.136

初演:不明

### 初期の作品中、随一の人気を誇る軽快な名曲

ディヴェルティメントとは、本来気晴らしや娯楽を意味する言葉であるが、音楽作品においてはさまざまなタイプの多楽章の器楽曲にこの呼び名が使われている。ザルツブルク時代のモーツァルトも多様な種類のディヴェルティメントを書いた。初期の作品でよく知られているのは、1772年初めに書かれたK.136からK.138までの3曲のディヴェルティメントだろう。なかでもK.136は演奏頻度の高い人気曲である。いずれも1772年初めにザルツブルクで作曲された。

曲は弦楽四重奏のために書かれており、おそらくは各パートひとりでの演奏が意図されていたものと推測されるが、現在では弦楽合奏で演奏されることも多い。

第1楽章はアレグロ。晴れやかで爽快な主題が心地よい。

第2楽章はアンダンテ。典雅で歌心にあふれた緩徐楽章。

第3楽章はプレスト。第1楽章の主題が変形されて現われる。対位法を用いた生真面目な表情を見せつつも、上機嫌で曲を閉じる。

#### 楽器編成

弦楽5部

## モーツァルト:交響曲 第34番 八長調 K.338

初演:1780年 ザルツブルク?

### 故郷ザルツブルクに別れを告げる交響曲

K.338というケツヘル番号からも察せられるように、本日のプログラムのなかではもっとも後に書かれたのがこの交響曲である。作曲は1780年。これはモーツァルトが故郷ザルツブルクで過ごした最後の年にあたる。すでにモーツァルトの心はザルツブルクを離れていたことが、手紙に残された数々の言葉から伝わってくる。

「ザルツブルクは僕の才能に見合った土地ではありません。音楽家たちが尊敬されず、劇場もなければオペラもない」「ザルツブルクのオーケストラはだらしく、余計な連中であらう」「もう僕はザルツブルクとこの町の人々にはがまんでできません」。この年の秋、モーツァルトは故郷を旅立ち、ひとりミュンヘンへと向かい、その後ウィーンへと赴くことになる。

しかし、ザルツブルク時代の最後の交響曲となったこの作品は、作曲者の満たされることのない境遇を反映することなく、隅々まではつらつとした生命力であふれている。モーツァルトも作品の出来栄には満足していたのだろう。1780年代にウィーンで改めてこの交響曲を演奏している。

第1楽章はアレグロ・ヴィヴァーチェ。あたかもオペラの序曲を思わせるような期待感に満ちた幕開けが印象的。濃密で力強く、充実した書法が後のウィーン時代の傑作群を予告する。

第2楽章はアンダンテ・ディ・モルト。モーツァルトは後にパート譜に「ピウ・トスト・アレグレット」(ほとんどアレグレットで)と書き加えている。弦楽五部によって情感豊かな楽想が紡ぎだされる。

第3楽章はアレグロ・ヴィヴァーチェ。躍動感にあふれた8分の6拍子のフィナーレ。ときに2本のオーボエを独奏者風に引き立てながら、ユーモアとともに喜びを爆発させる。

#### 楽器編成

オーボエ2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

### Profile

#### ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756~1791)

ザルツブルクに生まれ、後半生をウィーンで送った古典派を代表する作曲家。音楽家の父レオポルトにより幼少時から才能を見出され、神童として欧州にその名を知られることになった。10代より旺盛な創作活動を続け、オペラや協奏曲、交響曲、室内楽、宗教音楽など、あらゆるジャンルにわたって傑作を書き残している。ウィーンでは自らの独奏によるピアノ協奏曲や、「フィガロの結婚」をはじめとするオペラにより、時代の寵児として人気を博した。

